



君たちは世の中に出た。
学校の窓から見た世の中とはずいぶんと違っているだろう。
がっかりしたこともあろうし、また、こいつは面白いと思ったこともあろう。
けれど毎日同じような仕事を繰り返すことは、いやに、誰も思っていよう。
そしてこんなで一生を送ってはとも思う折があろう。
しかし毎日目先が変わることが生きるための必要な条件か。
それとも目先が変わらなければ、人の目的がとげられないか。
太陽は東から出て、西にはいる。
冬が去れば春が来る。昼の次は夜だ。
自然のものみな、同じ軌道を通っている。
毎日同じ仕事をするをつまらぬと思うものは、あわれな人だ。
同じ仕事のうちに、いろいろの深い意味が潜んでいる。
人の世の旅路をふりかえってみると、
その路の面白さや変化がうれしいのじゃない。
その旅路を踏みしめる一足一足の確かさが、大事なことだ。
君たちは日々の旅路をしっかりと踏みしめて進みたまえ。
その気持ちを失わなければ、いつとなく知らぬまに緑の山、
清い泉の楽しい村里に踏みいれるだろう。

成蹊学園創立者 中村春二

100年前からのメッセージ：「たしかなあしぶみ」

これは100年ほど前、成蹊学園の創立者 中村春二が成蹊中学校(旧制)の卒業生に贈った言葉です。
どうでしょう。まるで、変革だ、イノベーションだと「変わること」ばかりを
性急に追い求めてきた現代社会へと語りかけているような気がしてきます。

中村春二は、教育の基本的なあり方を「修養」としました。
知育の前に、まず人格養成を。人間はどんな困難な状況にあっても、それを乗り越える
「心の力」を備えており、その心の存在に気づくことで強固な精神力が増われる。
そう唱えたのは、それが時代不変の人間の基本的なあり方に他ならないからです。

大震災という国難を乗り越え、本当の豊かさを見すえた国へ、社会へ。
こんなときこそ、「心の力」を自覚することが、人を勇気づけます。
確かな一歩を踏み出せなければ、変革も起こせません。
成蹊学園もまたその一翼を担うべく、創立の精神を受け継ぎながら、新たな歩みを重ねていきます。

「心の力」を未来へ。成蹊学園は、2012年、創立100周年を迎えます。

成蹊教育100周年。

SEIKEI
100^{th.}